歴史にみえる建築労働者の賃金(1)

関西学院大学経済学部　准教授　高島　正憲

はじめに：前近代の建築コストを俯瞰する

ここ数年、日本はかつてない建築費の高騰にみまわれている。建築費の高騰の要因についてはさまざまなことが指摘されているが、新聞やニュースをみる限りにおいては、原材料高と人手不足を背景とした人件費の上昇によって、建築にかかわる資材価格や建設現場の作業費を底上げしているというのがおおよその理解のようである。筆者は建築方面の専門家ではないが、建築資材の高騰は、日本が原材料の少なくない部分を輸入に頼っていることが理由の一つになっているだろうし、人件費の高騰は、労働人口の減少や最低賃金の上昇、労働環境の改善を目的とした法整備が進んだことが影響していて、それらは現代日本の経済社会が構造的に抱える問題をダイレクトに反映したもので、その傾向はしばらく続くものと考えている。

とはいえ、こうした建築コストにまつわる諸問題は、何も今日にはじまったことでもない。歴史をひも解いてみれば、文献による情報が確認できる1300年ほど前の古代から、建築にまつわる記録は膨大に存在する。古代であれば、奈良時代の律令国家が国家的プロジェクトとして実施した平城京やその周辺地域での仏教寺院建設時の記録が残っている。律令国家はまがりなりにも中央集権国家を目指していたので、いまでいうところの公文書を作成していたが、その一部は奈良にある東大寺の正倉院文書などに残っており、そこにはどのような建築資材がどのくらいの量や価格で取引されたのか、建設にたずさわった人びとの賃金や労働日数、そして彼らはどのような建築道具をつかっていて、その値段はいくらであったのか、さまざまな情報をいまに伝えている。

これに対して、中世は日本列島が公家・武家・寺社という権門勢力によって分権的に支配されていた、いわば中央集権国家不在の時代なので、建築にかんする情報は各地の荘園領主であった寺院・神社の経営文書のなかにある。寺社の多くは京都・奈良に本拠を構えており、頻繁に建物の増改築をおこなっていたので、その建築作業にたずさわった大工をはじめとした職人への報酬や建築資材にかんする情報はかなり多い。この時期に作られた絵巻物に寺社建築にたずさわる大工たちの姿が描かれているのをみたことがある人も多いだろう（図１）。

近世になると、中世以来の宗教勢力は徳川幕府の規制などでその経済力を弱めるが、太平の世に

図１　中世の大工

注）槍鉋や釿など現在ではあまりつかわれなくなった工具をつかって木材を加工している。曲尺で計測をする者、見習いと思われる子供の姿もみえる。
資料）『春日権現験記絵巻（模本）』（文化庁webサイト・文化遺産オンラインより）

成長した三都（江戸・大坂・京都）で商いをいとなむ三井などの商家の経営文書に建築関係の記録を確認することができるし、林業関係の資料も残っている。明治期に官民の組織が江戸時代の商業について調査編集した資料があり、それらをまとめた統計表にも大工賃金などの情報が記録されている。

もちろん、前近代の歴史資料に豊富なデータがあるといっても、すべての時代やトピックで現代的な経済学のように分析ができる訳ではなく、数的情報そのものの信頼性は決して高いとはいいきれない部分もある。それでも、それらを他の情報も考慮したうえで統計的処理をほどこすこと、すなわち「推計」という作業によって、より歴史の実態にせまることは可能である。

このようにみていると、歴史上の建築コストの記録というものは経済学による歴史的分析の対象であり、つきつめるなら、それは経済史／経営史にかんする歴史資料であるともいえるだろう。筆者は2023年に上梓した『賃金の日本史：仕事と暮らしの一五〇〇年』において賃金を軸にして歴史を超長期で俯瞰する研究を試みたが、そこで利用したデータの大部分は歴史上の建築労働者たちの賃金であった。大工をはじめとした建築労働者の賃金もまた建築コストの重要な要素であることはいつの時代でも同じであろう。

本連載では、拙著『賃金の日本史』での知見も含め、歴史上にあらわれた建築コストの情報について、古代から近現代までの超長期の流れや、その時代時代における特徴的なエピソード、時代をまたがるトピックなど、経済学／経済史学／経営史学の研究成果を紹介し、今日もしくは将来の建築コストへのなんらかの含意のようなものを考えたいと思う。これが本連載のねらいである。

長期の歴史的実質賃金の推計：中世

連載初回となる今回は、歴史上の建築コストにかんするトピックのうち、長期にわたってデータの取得が可能である建築労働者の賃金をとりあげ、以降、数回にわたって賃金の歴史について考えてみたい。実は、賃金にかんするデータは、質・量ともに情報が限られた前近代資料の数的情報のなかでは、物価データと並んで比較的豊富に、かつ長期に得られるものである。それゆえに、経済史研究者の間では賃金と物価のデータは「経済の体温」のような存在として、これまで多くの分析がなされてきた（友部 1999）。

まずは、現時点での最新の前近代賃金の系列をみてみよう。今回は中世についてである。図２は13世紀後半から16世紀後半まで、日本の時代区分でいけば鎌倉時代から室町時代を経て戦国時代にいたるまでのおよそ300年にわたる、京都における大工の実質賃金の系列である。

この実質賃金の系列がどのように計測されたのか、その概要を簡単ではあるが説明していこう

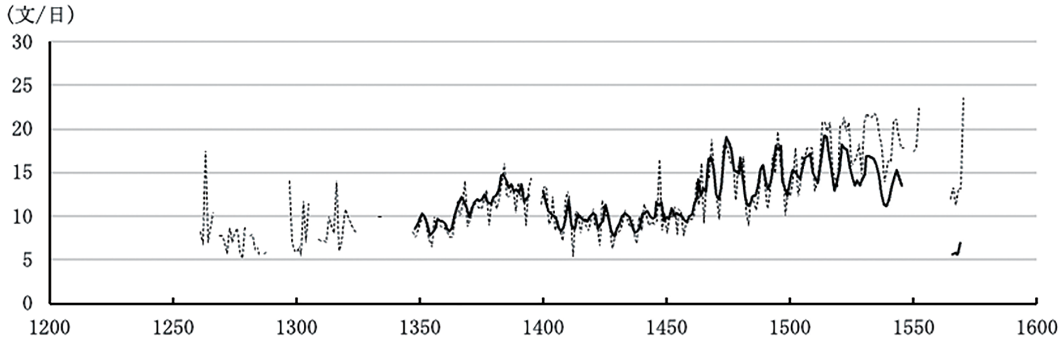

図２　中世京都における大工の実質賃金（米賃金）の推計、1261-1593年

注および資料）数量的分析が議論を重ねて進展することを示すため２系列をあらわした。Bassino, Fukao and Takashima（2010）による点線（1261-1593年）の系列を、斎藤・高島（2020）にて改訂したものが実線（1348-1593年）の系列である。

（今回・次回は長期にわたる趨勢を概観することを目的としているので、その推計方法の詳細については、今後の連載を待っていただきたい）。

現代的な経済学では、実質賃金は名目賃金を消費者物価指数で除することによって計算されている。消費者物価指数とは消費者が購入するさまざまな商品やサービスといった品目の小売価格の変化から測定されたもので、「デフレーター」ともいい、名目賃金を除することは「デフレートする」ということになる。今から1000年ほど前の中世では物価指数を構成する品目の価格データはあるにはあるが、その種類が少なく、また年次での系列が作成できるほどのまとまった数がないのが難点である。

だがあきらめてはならない。データがないのであれば、推計をするのが数量をもちいた経済史である。歴史上の物価データで唯一、長期系列が採れる品目が存在する。それは米である。稲作が始まり、列島に住む人びとの生活における主穀となった米は、主穀ゆえに古文書の売買記録に最も多くあらわれる品目となり、その価格は長らく物価の「基準」であり「王様」でもあった。また、徳川時代では「米遣いの経済」とされ、米以外の品目である「諸色」の値段は米価にある程度連動するものとされていた[1]。したがって、この米を消費者物価指数の代理として利用した実質賃金は、いうなれば「米賃金」というべきものである。

ただし、現在のような統計という概念のない時代の米価データである。それらは寺社の帳簿や日記を中心とした古文書に記録された米価を蒐集し、つなぎ合わせたものなので、それを統計学的手法で整備する必要がある。「つなぎ合わせた」というとあまり印象がよくないが、そもそもわからないことを考察することが研究という行為であるのだから、限られた情報のなかで考えうる方法を駆使して信頼性のある数値を導き出すということは、まさに経済史研究の醍醐味ともいえるだろう。

大工の賃金データも米価と同じように寺社資料から得られたもので、さまざまな手法で経済学的分析に耐えるように整備された加工データとなっている。奇妙なことに、当時「作料」「手間」とよばれた中世の大工賃金は、実は数百年を通じて100～110文でほぼ固定されていた（図３）。通常の経済学の理解では賃金にはそこそこの粘着性があるとされており、その長さが何百年単位で固定されているのは異常ともいえるが、それは中世社会が現代とは違う価値観であったことの証左でもある。この点については別の連載回で考察したい。

ところで、中世日本とひと括りにいっても、実際には物価賃金の地域差が存在するので、信頼性の高い推計をするには、なるべく同じ地域のもの、かつ長期的なデータが必要になってくる。中世の物価賃金データは豊富ではあるものの、そうした条件を考慮していくと、利用可能なものは京都か奈良あたりの記録に限定されるようになる。はじめにでも触れたように、荘園経営によって権勢を誇った寺社は京都・奈良に集中していたので、そこで雇われた建築職人の情報量が多く、詳細にな

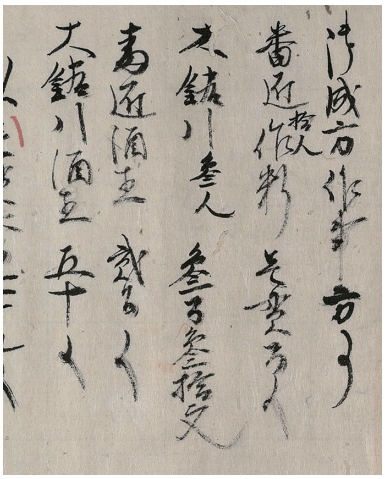

図３　大工の賃金

注）２、３行目に「番匠拾人作料　一貫百文」「大鋸引参人　参百参拾文」とあり、１人あたり110文の報酬が支払われ、４、５行目からは作料に加えて別途「酒直」が支給されていたことがわかる。
資料）「御成方作事方番匠作料等下行切符」（1439年（永享11）８月３日、東寺百合文書webより）

1　諸々の商品、もしくはその物価のことを「諸色」といい、いまの時代での物価に相当する。徳川時代には、米価と他の物価はある程度は連動するものと考えられていたが、米価が下落する一方で他の物価が高騰するという「米価安の諸色高直」という現象もみられた。

るのは当然といえば当然なのである。

賃金推計からわかること

では、この推計結果からどのようなことが観察できるだろうか？　図２のグラフをみればわかるように、中世を通じて大工の実質賃金は激しく乱高下を繰り返している。14世紀前半以前についてはその高下が極端かつ短期的であるため、拙速な議論はさけるべきだろう。逆に14世紀後半以降をみると、ある程度の周期性があるようにもみえるが、大きなトレンドとしては、大工の実質賃金は二度の上昇を経験していることがわかる。

最初の上昇は14世紀後半からである。この時期は室町幕府三代将軍である足利義満の治世であり、世にいう北山文化の最盛期に重なる。アメリカの経済史家W.W.ファリスは、この義満の時代を室町時代における経済発展の最適期（Muromachi Optimum）と評価したが（Farris 2006）、経済の好況は大工の賃金にもプラスとなったということになる。二回目の上昇は15世紀後半から16世紀前半の期間となっている。その背景として考えられるのは、応仁の乱（1467-1477年）で荒廃した京都が復興していく過程で建築需要が高まっていったことだろう。室町幕府の政治的求心力の低下もあって、畿内首都圏の経済が弱まったため、京都が本格的に復興し、往年の姿を取り戻すのは16世紀後半であったとされている（早島 2006）。

このように、中世という時代においても、大工たちの実質賃金は当時の経済社会の影響をうけていたことがわかる。また、最新の推計値（斎藤・高島 2020）を長期的視野でみた場合、大工の地位は、15世紀後半から16世紀初頭を最盛期として低下していったことになる。それは「大工職」とよばれる、大工が寺社との雇用契約において仕事と職場を確保する権利をもっていたのが、この時期になって解体していったこととも関連していると思われる。最盛期の大工や職人は寺社に召し抱えられた特権的な地位にあったが、中世後半になると、それ以外の自由な、いいかえれば国家や寺社といった権力の支配のおよばない「無縁・公界」[2]の大工や職人が増えていった（桜井 1996）。それは競争的な雇用関係にある市場の創出ともいえ、大工たちもいやおうなしにそうした社会経済のうねりに巻きこまれていった。近世の胎動が始まる16世紀の後半、大工の地位は大きく変化していったのである（次回に続く）。

＜著者略歴＞

1974年大阪府生まれ。一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学、経済学博士。専門は日本経済史／数量経済史。日本銀行金融研究所アーキビスト、一橋大学経済研究所研究員、日本学術振興会特別研究員PDなどを経て、2019年から現職。著書に『経済成長の日本史』（名古屋大学出版会、2017年）、『賃金の日本史』（吉川弘文館、2023年）など。

（主要参考文献）

1）斎藤修・高島正憲　(2020)「中世後期日本の実質賃金：変動と格差」『経済研究』71(2)、pp.129-143
2）桜井英治（1996）『日本中世の経済構造』岩波書店
3）高島正憲（2023）『賃金の日本史：仕事と暮らしの一五〇〇年』吉川弘文館
4）友部謙一（1999）「書評：斎藤修著　賃金と労働と生活水準：日本経済史における18-20世紀」『三田学会雑誌』92(1)、pp.229-235
5）早島大祐　(2006)『首都の経済と室町幕府』吉川弘文館
6）Bassino, J.-P., K. Fukao, and M. Takashima（2010）"Grain Wages of Carpenters and Skill Premium in Kyoto, c. 1240-1600：A Comparison with Florence, London, Constantinople-Istanbul and Cairo,"paper presented at Economic History Society Conference, Durham, UK, 28 March 2010.
7）Farris, W. W.（2006）*Japan's Medieval Population：Famine, Fertility, And Warfare in a Transformative Age*, Honolulu：University of Hawai' i Press.

2　日本中世における自由を意味する用語で、人間や場所が世俗の私的権力の支配下にない存在であることを指す。